

# エレクトリックギター教則本の歴史と今後への展望

加茂文吉

本論文では、エレクトリックギター教則本の歴史を概観し、自己主導型学習理論を基にした分析を行う。著者の博士論文を踏まえ、腕時計型デバイスを活用した高校生向けのギターセミナーを実施し、その技術的実証を行った。さらに、国内の著名な教則本制作企業の編集者にインタビューを実施し、教則本の歴史とさらなる発展の方向性を明らかにした。これらの分析から、技術を取り入れた新しい教則本の可能性が示唆され、今後の展望が考察されている。

キーワード：ポピュラー音楽教育、エレクトリックギター、教則本、STEAM

## 1. はじめに

### 1.1 研究背景と本研究の目的

著者は20年以上にわたり、ギター教則本やDVDの制作を通じてギター技術の教育法に関与してきた。本・CD・DVD・動画といったメディアの変遷がある中で、演奏技術に関する要因が音や映像だけでは把握しづらいケースもあり、そのような暗黙知の解明や、演奏をマスターした際に「一体いつ弾けるようになったのか?」という疑問に対するフィードバックが難しい点に課題を感じた。これを解決するため、2023年3月に博士論文「ギター演奏の運動評価による技量獲得暗黙知の解明と教育への応用」を発表した。エレクトリックギターの場合、ピックアップの音響特性により、演奏音と技量の関係を正しく評価することは困難である。しかし、この博士論文では、ピッキング奏法時の手首の回転動作を評価するために、手首のひねり回転角速度信号を時間的に2階微分した角躍度(角加加速度)を用いた評価パラメータが、プロギタリストによる演奏では一定の分布を示すことを明らかにした。また、利き腕のピッキング奏法時における肘と手首の動作を数値化し、プロとアマチュアの演奏の違いを解析することが可能となった。このように、演奏動作に基づく客観的な評価指標を用いることで、ギター演奏における独習を効果的に支援できる可能性が示唆された。<sup>(1)</sup>

さらに、この博士論文で解説した腕時計型モーションセンサデバイスを活用し、2023年11月18日に58名の高校生を対象にギターセミナーを実施し、演奏技量の評価とフィードバックが学習効果をどのように向上させるか

を実証した。この実証を通じて技術の有用性が確認され、ギター教育の新たな方向性が見えてきた。本研究では、この実証結果を背景に、2024年5月～8月にかけてエレクトリックギター教則本を制作する有識者に対してインタビューを実施し、教則本の歴史的背景と現状を調査した。これにより、エレクトリックギター教則本の役割と課題、そして博士論文で提案した技術が今後の教則本の改善にどのように貢献できるかを明らかにし、ギター教育の新たな方向性を確立することを本研究の目的とする。

### 1.2 ギターセミナーによる実証研究

会場は日本工学院八王子専門学校ミュージックカレッジを使用し、首都圏高校6校の軽音楽部に所属する初心者からギター歴数年の高校生と、高校の部活顧問教諭が参加した。高校教諭には事前の確認をし、参加者全員に内容説明と参加同意書による事前確認の後、セミナーを実施した。高校生軽音楽部は部活動の性質上、基本的に講師を迎えて音楽を習う方式ではなく、楽器の練習は独習をベースに行われる。従って、独習のノウハウを必要とする軽音楽部高校生と、独習のノウハウを教則本としてユーザーに届ける企業に研究内容を直接体感してもらうことで、研究を社会実装することと、芸術(Art)あるいは教養(Arts)と数学や物理学、情報科学といったサイエンスに関する学問を融合することで学習者と教師の双方にとって新たな気づきや学びをもたらすSTEAM教育の実践を行うことををねらいとした。

### 1.3 教則本制作企業の取材による技術確認

このギターセミナーにおける教育手法は、ギター教則

本ならびに現在のギター演奏教授法の課題を解決することを目的とし、国内の著名な教則本制作企業である(株)シンコーミュージック・エンタテイメントと(株)リットーミュージック(以下、リットーミュージック)の編集者に、教育手法の有用性を直接確認してもらった。2023年8月25日には、IEEE Japan Councilの講演会において、教育手法である腕時計型モーションセンサデバイスの活用について解説し、この講演会には(株)シンコーミュージック・エンタテイメント(以下、シンコーミュージック)取締役 吉田聡志氏にも参加していただいた。また、2023年11月18日には、シンコーミュージックに取材してもらい、その模様が同社の「ヤング・ギター 2024年2月号」にて「腕時計型デジタル・デバイスを活用したギターレッスン革命!」として報じられた<sup>(2)</sup>。さらに、リットーミュージックには、2023年2月に行われた著者の博士論文公聴会を取材していただき、同社のWEBメディア「ギター・マガジンWEB」にて、腕時計型モーションセンサデバイスが報じられた<sup>(3)</sup>。また、2024年3月にはモーションセンサデバイス開発者の松下宗一郎教授の指導のもと、東京工科大学コンピュータサイエンス学部の学生たちが参画し、2023年3月に著者が発表した博士論文に基づいて改善されたデバイスを展示した“第28回一般社団法人情報処理学会シンポジウム INTERACTION 2024”におけるデモ発表「腕時計型モーションセンサによるエレキギター演奏運動可視化システム」を取材してもらい、同社のWEBメディア「アコースティック・ギター・マガジンWEB」にて報じられた<sup>(4)</sup>。この際、リットーミュージックの編集者にはモーションセンサデバイスを体験していただき、編集者の私見が「アコースティック・ギター・マガジンWEB」に掲載された<sup>(4)</sup>。

#### 1.4 モーションセンサデバイスとソフトウェアの仕組み

このギターセミナーで使用された腕時計型モーションセンサデバイスは、「ヤング・ギター 2024年2月号」に掲載された写真(図1)で紹介されている<sup>(2)</sup>。デバイスは、約37グラムの小型・軽量な腕時計型ケースに、3軸加速度センサ( $\pm 16G$ ,  $1G=9.8m/s^2$ ), 3軸角速度センサ( $\pm 2000dps$ , degree per second), 16ビットマイコン, 32GBのマイクロSDメモリ, および充電式バッテリーを搭載し、操作はシンプルに電源スイッチのみで行える。また、毎秒500回のデータ記録(サンプリング)速度に対応し、連続で11時間以上の動作が可能のため、5時間を超える授業内での実験データを全てカバーできる仕様となっている。センサデバイスには高精度の時計が内蔵されており、ギター演奏を行った時刻を記録することで、対応する運動データを正確に識別できる。記録されたデータは、SDメモ리카ードを使用してPCに取り込み、詳細な分析が可能である。また、センサフュージョン技術により、デバイスの重力に対する姿勢角度を算出し、加速度や角速度などの運動信号を一般的な表計算ソフトなどで解析できる。さらに、PCソフトを使用してこれらの運動信号を解析し、ピッキングの強度、ピッキングの軌道、アクセントの強さをワイヤレスで受信し、可視化できる。この機能により、演奏者の技術を視覚的に確認し、独習に役立てることが可能となる。

#### 1.5 ギターセミナーの運用方法

図2に、このギターセミナーの教室レイアウトを示す。ヘッドホン、オーディオインターフェース、PC(図2のP01からP40)が40台配置され、オーディオインターフェースを経由して、エレクトリックギターの音はヘッドホンからメトロノームと共に確認できる環境であった。P21からP30の10台に腕時計型モーションセンサデ



図1 ヤング・ギター 2024年2月号で紹介された写真<sup>(2)</sup>

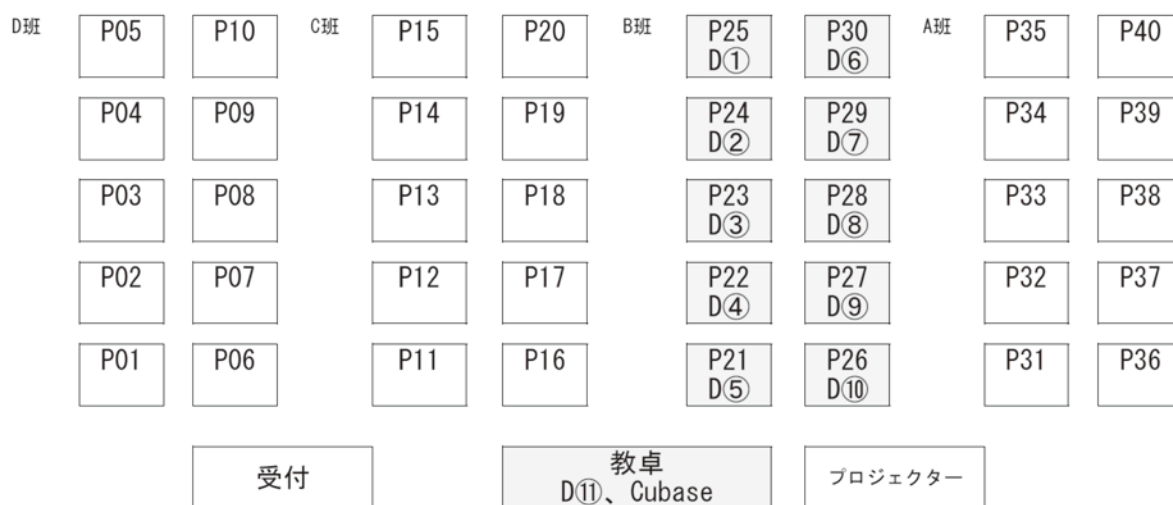


図2 ギターセミナーの教室レイアウト

バイスとPCソフトを設置し、高校生を午前35名、午後23名に分け、それぞれA～D班に4班ずつ編成した。午前は9時45分から実施し、教員・スタッフ紹介の後、参加者全員に対して本日レクチャーするギター奏法とモーションセンサデバイスについての解説を30分間行った。その後、B班から20分ずつ腕時計型モーションセンサデバイスを使用し、B班→C班→A班→D班の順でP21からP30の10台の座席に移動しながらギターセミナーを実施した。著者がモーションセンサデバイスを使用している班をレッスンしている間、残りの3班は他ギター講師2名が座席を回りながら冒頭に全体にレクチャーしたギター奏法の確認を行った。P21からP30の10台には、リアルタイムで演奏に関する運動信号を図1（左）のように視覚的に確認することができた。参加後に、本ギターセミナーの高校生の感想と、「ヤング・ギター」に関してアンケートを行った。

#### 1.6 ギターセミナー後の分析計画とインタビュー実施の決定

このギターセミナーでは、モーションセンサデバイスを使用した新しい教育手法が導入され、ギター教育における新たな可能性が示唆された。セミナー後に行ったアンケートやデータの分析の詳細な検討により、教則本の役割やその改良点をさらに明確に理解するための基盤が形成されると考えられる。分析を進めるにあたり、教則本の歴史的背景を踏まえた分析が不可欠であると判断したため、2024年5月から8月にかけて、エレクトリックギター教則本を制作する有識者に対してインタビューを実施することにした。

## 2. 教則本の歴史と役割

### 2.1 独習と自己主導型学習

本章では、エレクトリックギター教則本を評価する基準を、先行研究に基づき検討する。Mizok-Taylorの研究<sup>(5)</sup>では、自己主導型学習（Self-Directed Learning, SDL）を促進するための11の基準が提案されており、これをエレクトリックギター教則本に適用できるか評価する。自己主導型学習とは、計画的に目標を設定し、学習の進行や成果を自己評価しながら進める独習の一形態である。デジタル大辞泉（小学館）によれば、教則は「特定の技術や知識を伝える手順や規則」であり、教則本は「楽器演奏の基本技法を段階的に学べる本」と定義される。一方、教育は「知識の啓発や技能の教授、人間性の涵養を通じて能力を伸ばすこと」を含む広範な活動である。この違いを理解することで、エレクトリックギター教則本の役割が明確になる。教則本は単に技術を伝えるだけでなく、学習者が自己主導型で独習を進められるよう設計されるべきである。特に中高生から成人まで、幅広い層の学習者が自主的に学習できる柔軟性が求められる。

### 2.2 エレクトリックギター教則本における自己主導型学習の評価基準

エレクトリックギター教則本は、独習のための教材として広く利用されており、自己主導型学習のツールとしての役割も重要視されている。特に中高生や成人が個々のペースで学習を進めるための手段として、教則本は独習の道具として発展してきた。しかし、これらの教則本が自己主導型学習をどの程度支援しているかについて



は、十分な分析が行われていない。本研究では、Mizok-Taylor の「Promoting Self-Directed Learning in Adult Piano Instruction」<sup>(5)</sup>を参照し、自己主導型学習の理論をエレクトリックギター教則本に適用して分析を行う。Mizok-Taylorの研究では、Malcolm Knowlesの自己主導型学習理論と Hung-Ling Chenの研究を基に、成人向けピアノ教則本が自己主導型学習をどの程度促進しているかを評価するための基準が設定された。この基準をもとに、著名なエレクトリックギター教則本がどの程度SDLを支援しているかを評価する。

### 3. エレクトリックギター教則本の歴史概観

#### 3.1 教則本の起源と初期の進化

柳田は、弦楽器の発展と変遷について論じ、1936年にGibson社が初のアーチトップ型エレクトリックギターを発売したことを報告している。また、1952年にはLes Paulと開発したソリッド・ギター「レスポール型」、1954年にはFender社がStratocasterを発売し、これによりエレクトリックギターが普及し始めた<sup>(7)</sup>とされる。これらのギターが登場したことにより、エレクトリックギターが世に浸透し始めたのは、この1952年から1954年の時期であると考えられる。こうした状況下で、ギター演奏技術を広める教則本の需要が高まっていたことが推察される。Bert Weedonの公式サイトによれば、この時期に出版されたWeedonの教則本「Play in a Day」<sup>(8)</sup>は、特に初心者向けに書かれ、多くの著名なギタリストが初めてギターを手にした際にこの本を用いたとされる。「Play in a Day」は1957年に初版が出版され、以来、John Lennon, Paul McCartney, Eric Clapton, Mark Knopfler, Brian May, Pete Townshend, Sting, Mike Oldfield, Mike Read, John Miles, Steve Hillageなど、数多くの著名なギタリストがこの本でギターを学んだとされる。Weedonは「世界中のギタリストにギターを教えた男」として知られ、同書は200万部以上を売り上げ、世界中で出版されている。このことから、同書がエレクトリックギターの普及に与えた影響は非常に大きかったと考えられる。また、日本国内においても、シンコーミュージック（当時は（株）新興楽譜出版社）の公式サイトによれば、1965年に初の本格的エレキ・ギター教則本を出版したとの記録があり<sup>(9)</sup>、エレクトリックギター教則本の需要と普及が進んでいたことがわかる。この時期における「Play in a Day」の出版は、世界的なエレクトリックギターブームの一翼となった。以上の点から、

Weedonが1957年に出版した「Play in a Day」は、世界で最初に普及したエレクトリックギター教則本であると結論付けられる。同書は、エレクトリックギターの技術を広め、多くのギタリストに影響を与えた点で、ポピュラー音楽史における重要な位置を占めている。「Play in a Day」では、ポピュラー音楽で重要な要素とされる「コード（和音）」に関して、ダイアグラムと呼ばれる図を使って解説がなされている。図3は、ダイアグラムの例である。

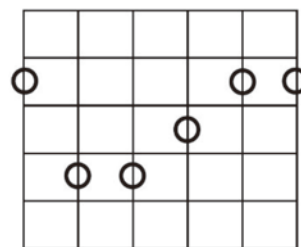


図3 ダイアグラムの例

Weedonの教則本では、図3の左側が6弦（低音弦）側、右側が1弦（高音弦）側として表記されており、演奏上必要なコードネームに対して音を視覚的に捉えることができる。エレクトリックギターが世に浸透し始めたと考えられる1950年代の時期において、Weedonは既にギターの指板の視覚化を用いた学習法に取り組んでいることがわかる。

#### 3.2 日本国内における教則本の変遷

3.1で前述したように、日本国内においてはシンコーミュージック（当時は（株）新興楽譜出版社）の公式サイトによれば、1965年に初の本格的エレキ・ギター教則本を出版したと記録されている。この教則本について、同社の取締役である吉田聡志氏に2024年5月にインタビューを行ったが、時代の移り変わりとともに、この本に関する詳細な情報を得ることは難しかった。そのため、吉田氏の紹介により山本隆士氏に2024年8月にインタビューを行った。山本氏は1942年3月7日、千葉県生まれで、中央大学在学中に新興楽譜出版社のジャズ誌「ダウンビート」でアルバイトを開始。その後「ミュージック・ライフ」の副編集長を経て、1969年に「ヤング・ギター」を創刊し、1998年までの30年間、編集長を務めた。Musicmanは、山本氏のキャリアを「日本のロックの歴史そのものであり、重要な語り部である」と評価している。「ヤング・ギター」は1969年の創刊以来、国内外のギタリストに注目し、特にエレクトリック・ギターの奏法に関する詳細な分析記事や譜面を提供し、絶大な

人気を誇っている。同誌は主に高校生や専門学校生、大学生、若年サラリーマンを読者層としており、楽器購入意欲の強い若者層が大半を占めていると、シンコーミュージックの公式サイトで報告されている<sup>(11)</sup>。吉田氏は、日本最古のエレクトリックギター教則本として実質的に位置付けられるのは「ヤング・ギター」であると述べている。同誌は月刊であり、発行部数は6万部に達する<sup>(11)</sup>。これらの点を踏まえると、この主張は妥当である。図4は、「ヤング・ギター」創刊号の表紙である。



図4 「ヤング・ギター」創刊号の表紙

表紙には『YOUNG GUITAR』と記載されているが、奥付では『YOUNG-GUITAR』とされており、1969年当時の名称がまだ統一されていなかったことがうかがえる。山本氏によれば、シンコーミュージック公式サイトに記載されている「1965年に初の本格的エレキ・ギター教則本を出版している」という記述について、彼が高校生である1957年から1960年の間に購入した「Shinko WESTERN HIT SONGS/ウエスタン・ヒット・ソング集」に「一週間ギター独習（三戸知章編著）」の広告が含まれていたことが確認できたという。さらに、山本氏は自身がシンコーミュージックに入社後、「歌謡曲を弾くための一週間ギター独習（牧野昭一編著）」の制作に参加したとも語っている。また、三戸版と牧野版の「一週間ギター独習」は共に商標登録番号0428117(1953年登録、1993年に失効)であることが特許庁の記録から確認できた。これにより、日本最初の本格的エレクトリックギター教則本は1957年から1960年に発売された「一週間ギター独習（三戸知章編著）」であるとも考えられる。しかし、当時のエレクトリックギター奏法に関しては、「コード（和音）」に比べ、「リードギター（ギター・ソロ）」の奏法に関する情報がまだ不足していたと推測される。一方で、山本氏は、「別冊太陽 日本のロック 50s～90s（平凡社）」内の「日本のロックの変遷」で、氏が制作したザ・

ベンチャーズ・スタイル（1965年、新興楽譜出版社）」について、

「ベンチャーズがエレキ・ブームを作った」「ハイ・ボジションさえ知らなかったのに、良く作ったよね（笑）」

と述べており、当時の技術不足にもかかわらず、本を作り上げたことへの回顧を述べている<sup>(9)</sup>。この発言は、当時の日本におけるエレクトリックギター奏法がまだ発展途上であったことを物語っている。山本氏によれば、この本はベンチャーズの曲ではなく「リード・ギターを含めた演奏スタイル」を紹介するものであり、クレームを避けるための配慮がなされていた。したがって、本稿ではエレクトリックギター教則本の歴史において、日本国内における初出のエレクトリックギター教則本は山本隆士氏が制作した「ザ・ベンチャーズ・スタイル（1965年、新興楽譜出版社）」であるとし、初期に登場し、その後広く普及したのは「ヤング・ギター」であり、これがエレクトリックギター教則本の発展に大きな影響を与えた<sup>(9)</sup>と結論付ける。

#### 4. 教則本の評価と分析：シンコーミュージックおよびリットーミュージックの事例

##### 4.1 教則本評価の基準とインタビューの手法

1.6で説明したように、本研究では2024年5月から8月にかけて、エレクトリックギター教則本を制作する有識者に対して対してインタビューを実施した。2.2で説明したMizok-Taylorの研究では、ピアノ教則本が自己主導型学習を促進するために以下の11の基準を設定している<sup>(5)</sup>。

- (1) 目標は明確に説明されているか？
- (2) 学習者が学ぶ音楽に選択の余地があるか？
- (3) 新しい概念は明確に説明されているか、それとも学習者が教師に完全に依存しているか？
- (4) 学習者が学習中に困難を解決する際に、自分で意思決定を行う機会があるか？
- (5) 教則本に問題解決の提案があるか？
- (6) 音楽の解釈に関する議論があるか？
- (7) 新しい楽曲を学ぶための提案があるか？
- (8) 概念に関する追加の参考資料があるか？
- (9) 教則本に含まれる特定の音楽スタイルに関する追加の楽曲が提案されているか？
- (10) 教則本が提供する情報の割合と、学習者に考えさせるための質問形式の割合はどの程度か？
- (11) 教則本は成人の過去の音楽経験を反映して、概念

を説明するよう促しているか？

Mizok-Taylorはこの基準を用いて、3冊の主要なピアノ教則本を分析したところ、多くのピアノ教則本は基本的な目標や概念を明確に説明しており、学習者が独力で理解できるようになっているが、学習者が自主的に情報を発見したり、学習を深めたりする機会は限られていることを報告している。研究対象としたピアノ教則本では、レポートリーの選択肢が提供されておらず、追加の学習資料もほとんど提案されていなかった。その結果、教則本は多くの場合、学習者が教師に依存する傾向があり、自己主導型学習を十分に促進していないと結論付けられている。Mizok-Taylorの研究からは、成人向けピアノ教育における自己主導型学習をより効果的に支援するために、教則本の設計に改善が必要であることが示唆されている<sup>(5)</sup>。

本研究では、この基準をエレクトリックギター教則本に適用し、成人だけでなく中高生も含めた多様な学習者が、どの程度自己主導型で学習を進められるような教材設計がなされているかを評価する。この分析により、教則本が学習者の自主性を促進し、自己主導型学習を支援するための改善点が明らかになるだろう。本章では、教育分野で広く使用されている半構造化インタビュー手法を用いて、「ヤング・ギター」の複数号にわたる教則本群について、2024年8月に（株）シンコーミュージック・エンタテイメント取締役の吉田聡志氏および元「ヤング・ギター」編集長の山本隆士氏にインタビューを行った。また、（株）リットーミュージック 出版3部 額賀正幸氏には、彼が編集を担当した様々な教則本群について2024年5月に意見を伺った。インタビューは、回答者が自由に考えを述べられる環境を整え、質問者による誘導が起らないよう配慮して実施した。内容は、対象者の許可を得て録音し、文章に書き起こした後、Mizok-Taylorの11の基準に基づいて分析を行った。

#### 4.2 評価基準に基づくシンコーミュージックの教則本分析

（株）シンコーミュージック・エンタテイメント取締役 吉田聡志氏と、元ヤング・ギター編集長 山本隆士氏へのインタビューを基に、Mizok-Taylorの11の基準に基づき「ヤング・ギター」の教則本群を分析した。

##### (1) 目標は明確に説明されているか？

吉田氏は、「その時に流行している音楽をギターで弾

くにはどうすれば良いか？」という問いに答えることが、ヤング・ギターの基本的な目標であり、同誌がその元祖であると述べている。ヤング・ギターは月刊誌としての強みを活かし、毎月流行の楽曲を弾くための完全コピー譜を提供している。また、シンコーミュージックの公式サイトには、1969年の創刊以来、国内外の多くのギタリストに支持され、その音楽性や奏法、サウンドを追求する<sup>(11)</sup>内容が高く評価されていると記されている。特に、エレクトリックギターの奏法に関する緻密な分析記事や譜面は、国内外で絶大な人気を誇っている。これらの点を踏まえると、ヤング・ギターの目標は学習者に対して明確に説明されていると考えられる。

##### (2) 学習者が学ぶ音楽に選択の余地があるか？

ヤング・ギターに掲載される楽曲は毎月更新され、1冊に複数の楽曲のコピー譜や奏法分析が含まれている。これにより、学習者は自分が弾きたい曲が掲載されている時にヤング・ギターを購入することができる。また、偶然購入した号に掲載されている楽曲から、弾きたい曲を選択する余地もあると考えられる。

##### (3) 新しい概念は明確に説明されているか、それとも学習者が教師に完全に依存しているか？

ヤング・ギターは常に新しい概念を取り入れており、創刊号には「ひとりで多重奏・グループサウンズを楽しもう」というコラムが掲載されていた。これは奏法に加え、楽器や機材面の概念についても説明していることを示している。一方で、山本氏によると、1950年代の日本では、みんなで音楽を演奏するという文化があまり根付いておらず、特にエレクトリックギターの演奏方法に関してはほとんど未知の状態だったという。アーティストが自分の演奏法を無意識的に実行している場合、言葉での説明が難しく、完全に伝えることができない場合も考えられる。これは、アーティストが暗黙知として習得している技術を、学習者に教える際に説明が不十分になり得ることを示している。このため、学習者はアーティストの説明に依存しているものの、完全には理解できない部分があり、さらに教師の補完が必要となる場合もあると考えられる。

##### (4) 学習者が学習中に困難を解決する際に、自分で意思決定を行う機会があるか？

ヤング・ギターに掲載される楽曲の中でも、特に1980年以降の楽曲は、ハードロックやヘヴィメタルの



(5) 教則本に問題解決の提案があるか？

(6) 音楽の解釈に関する議論があるか？

(7) 新しい楽曲を学ぶための提案があるか？

(8) 概念に関する追加の参考資料があるか？

ヤング・ギター：クリスは以前、手首のスナップよりも腕全体を使ったピッキング・スタイルだと言っていたよね？

キコ：手首のスナップを使うという事は、つまり力を抜くって事なんだよね。ただ、スティーヴ・モーズのプレイを観察すると、右手の力が抜けているように見えないんだよなあ。

これは、ギター教則本の歴史の中でも非常に重要なインタビューであると考えられる。何故なら、多くのギター教則本では「力を抜く」という概念が広く説明されていることが多いが、クリス・インペリテリはそれに対して、

デビュー当初は「腕全体で弾く」と発言していた。しかし、一定期間後にその概念を更新し、「腕全体で弾くと力が入る」、「手首で弾いて力を抜かなきゃ」と発言しているのである。ギター演奏上の重要な概念に関して、後に追加された重要な参考資料と位置付けられる。

(9) 教則本に含まれる特定の音楽スタイルに関する追加の楽曲が提案されているか？

ヤング・ギター編集部は、別冊・増刊という方式で、教則本や機材深掘り、アーティスト1冊まるごと特集などの教則本や映像付き教則本を定期的に出版している。<sup>(15)</sup> 1993年に出版された、ヤング・ギター 12月増刊スーパー・ギター・ヒーローズでは、1990年代をリードするスーパー・ギタリストについて深掘りした奏法分析・インタビュー・機材紹介に加えて、楽曲のスコアが掲載されている。<sup>(16)</sup>

(10) 教則本が提供する情報の割合と、学習者に考えさせるための質問形式の割合はどの程度か？

ヤング・ギターには「完コピ大賞」という企画があり、誌面にて提供されている楽曲を読者が完全再現して編集部へ送付し、選ばれた人が編集部からのコメント付きで表彰されるというコンテストを実施していた。また、質問形式ではないが、楽曲の難易度が読者自身にとって困難過ぎないか考えられるように楽曲にライオン・ワニ・サル・クジラ・ゾウ・パンダといった難易度をつける配慮がなされていた。ただし、割合という意味においては、教則本が提供する情報の割合が多く、学習者側から教則本制作サイドへの情報の流れを作ることは困難であると考えられる。

(11) 教則本は成人の過去の音楽経験を反映して、概念を説明するよう促しているか？

これは、教則本が学習者の既存の知識や経験を無視せず、それらを活かしながら新しい知識を習得させる方法を用いているかどうかを確認する基準である。これにより、学習者は単に新しい概念を一から学ぶだけでなく、自身の過去の経験に基づいてより効果的に学ぶことが期待される。山本氏は、ヤング・ギターを考案した際に、ピーター・ポール＆マリーのコンサートのときに、彼らがカポタストをつけて弾いているのを思い出して、カポタストを付けることを考えた<sup>(10)</sup>とMusicmanのインタビューで述べている。そうすれば誰でも知っているコードの形で弾けるからだ。これは過去の音楽経験を反映し

て新しい楽曲に向き合える画期的な方法であると考えられる。これは成人に限らず、誰もが活用できる方法である。

#### 4.3 評価基準に基づくリットーミュージックの教則本分析

(株)リットーミュージック 出版3部 額賀正幸氏へのインタビューを元に、Mizok-Taylorの11の基準に基づき、彼が編集した教則本群を分析した。額賀氏は20年以上にわたり同社で教則本の制作に携わっている。

(1) 目標は明確に説明されているか？

(株)リットーミュージックの教則本「ギターがうまくなる理由 ヘタな理由」は、タイトルに「理由」という言葉が示している通り、目標が明確である。「ギターがうまくなる理由 ヘタな理由」は、症状→原因→対策という流れで、まず論理的に上達のポイントを把握し、その後で練習フレーズ集に移行する構成となっている。<sup>(17)</sup> 「うまへたシリーズ」として、ギター、ベース、ピアノ、ドラムなど他楽器にも展開されており、各楽器版も人気を博している。

(2) 学習者が学ぶ音楽に選択の余地があるか？

(株)リットーミュージックの「ソロ・ギターのしらべ」シリーズは、1997年に誕生した、古今東西の名曲をひとりで演奏して楽しめるCD付き楽譜集である。2024年現在、シリーズ累計で100万部を突破しており、収録楽曲は非常に充実しており、学習者にとって多様な選択肢を提供している。また、単なる楽譜集ではなく、演奏法についての解説も含まれており、教則本としての機能も果たしている。

(3) 新しい概念は明確に説明されているか、それとも学習者が教師に完全に依存しているか？

教則本「ギターがうまくなる理由 ヘタな理由」の公式サイトでは、将来的に音楽の分野でも科学的トレーニングが導入される可能性が示唆されている。ただし、現時点では適切な科学的な調査法が見あたらなかったため、本書では科学的な裏づけは行われておらず、著者が多くのギタリストにレッスンを行ってきた経験が中心となっていると記されている。<sup>(17)</sup> このため、教則本では新しい概念が著者の豊富な経験に基づいて明確に説明されているものの、学習者がその内容を科学的な根拠も含めて理解するためには、さらに教師の補完が必要となる場合



もあると考えられる。

- (4) 学習者が学習中に困難を解決する際に、自分で意思決定を行う機会があるか？

「ギターがうまくなる理由 ヘタな理由」や「ソロ・ギターのしらべ」シリーズでは、著者自らが譜面を作成し、模範演奏音源も付属しているため、音源と譜面の不一致が生じる可能性は低いと考えられる。また、著者かつ演奏者による詳細な解説も含まれており、学習者が直面する可能性のある困難を極力排除する仕組みが整えられている。一方で、学習者が解説通りの奏法を実践しても、譜面通りに演奏ができない場合、困難を解決するために自ら意思決定を行う機会は限られていると考えられる。

- (5) 教則本に問題解決の提案があるか？

「ギターがうまくなる理由 ヘタな理由」では、1つの症状に対して複数の原因を探り、それに基づいたギター・トレーニングを行う形式でレクチャーが進められる。この点が、巷に溢れる「ただ練習譜例を並べただけのトレーニング本」とは一線を画しており、問題解決のための具体的な提案がなされていると言える。

- (6) 音楽の解釈に関する議論があるか？

教則本「直伝指導！ 実力派プレイヤーへの指標」では、生前に数々のビッグ・アーティストに携わり、日本の音楽シーンを牽引してきた佐久間正英が、独自のトレーニング方法や、プロに求められる能力、心構えを解説している。さらに、JIRO氏（GLAY）やTAKUYA氏などトップアーティストとの対談が含まれており、これにより音楽の解釈に関する議論が行われていると考えられる。

- (7) 新しい楽曲を学ぶための提案があるか？

教則本「ギター朝トレ15分！ 忙しい人のための濃密練習法」は、朝の短い時間を使って集中トレーニングできる内容で構成されている。セッション&オリジナル曲対策、音楽理論、基礎～超絶テクニックまで網羅し、計26の音楽ジャンルで構成された96本の譜例が掲載されており、新しい楽曲を学ぶための提案がなされていると考えられる。

- (8) 概念に関する追加の参考資料があるか？

教則本「ひたすら弾くだけ！ 超絶ギター・トレーニング」の冒頭では、速弾きの定義が示されている。速弾き

とは何かを明確に定義するのは難しいが、本書では追加の参考資料として、ディーブ・パープルの「ハイウェイ・スター」のギター・ソロを例に挙げ、同曲のテンポ（BPM=170）での16分音符を速弾きの基準として概念を説明している。

- (9) 教則本に含まれる特定の音楽スタイルに関する追加の楽曲が提案されているか？

「ソロ・ギターのしらべ」シリーズの公式サイトでは、各シリーズに収録された全498曲を五十音順で検索できる機能が提供されている。この機能は、単なる「ギター・ソロ」ではなく、ギター1本で無伴奏に楽曲を演奏する「ソロ・ギター」という特定の音楽スタイルに関連する追加の楽曲の提案として十分であると言える。

- (10) 教則本が提供する情報の割合と、学習者に考えさせるための質問形式の割合はどの程度か？

「ソロ・ギターのしらべ」シリーズでは、読者からのハガキ投稿によって読者ニーズを掴み、楽曲選定の基準としていたと額賀氏は語る。また、楽器店に足を運び読者視線のコミュニケーションをしながら教則本のアイデアを探っていると額賀氏は語っており、制作プロセスにおいて学習者からの意見を極力取り入れる意向が見える。また、教則本「ひたすら弾くだけ！ ギター・トレーニング」は、ギタリストに不可欠な基礎力の養成を目的としたトレーニング集と額賀氏は位置付けており、スポーツ選手は、プロ、アマなどのレベルを問わず、走り込みや筋トレといった基礎トレーニングを必ず行うことを例に挙げ、教則本からは難しい情報提供は極力押さえて、学習者が「目的別“ひたすら”トレーニング・メニュー」にて、メニューを組んで練習できるような設計となっている。このように、学習者に考えさせるための設計は行われているが、割合という意味においては、教則本が提供する情報の割合が多く、学習者側から教則本制作サイドへの情報の流れを作るとは基本的には困難であると思われる。

- (11) 教則本は成人の過去の音楽経験を反映して、概念を説明するよう促しているか？

ここはシンコーミュージックと同様に、エレクトリックギターにはタブ譜とカポタストが導入されたことにより、過去の音楽経験を反映して新しい楽曲に向き合える画期的な方法が（株）リットーミュージックの教則本にも導入されている。また、成人に限らず誰もがこの方

本日のSTEAM式ギタークリニックはいかがでしたか？

58 件の回答



図6 STEAM式ギターセミナーの高校生の感想

腕時計型デバイスを使った「目や耳で感じ取れないギター演奏の解析」についてどう思いましたか？

58 件の回答

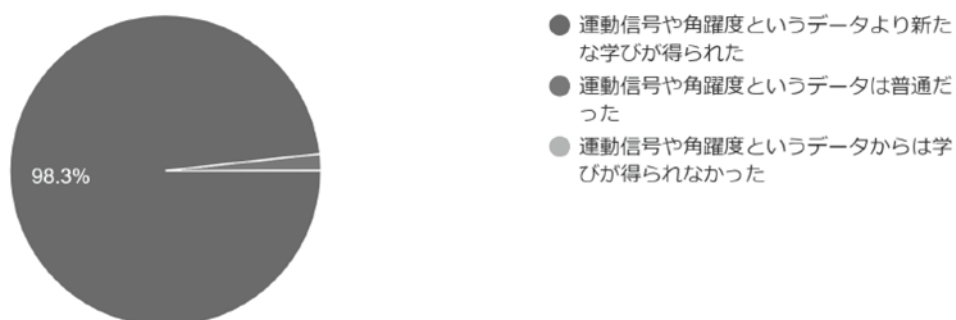


図7 運動信号に関する高校生の感想

「ヤングギター」というギター雑誌をご存知でしたか？

58 件の回答

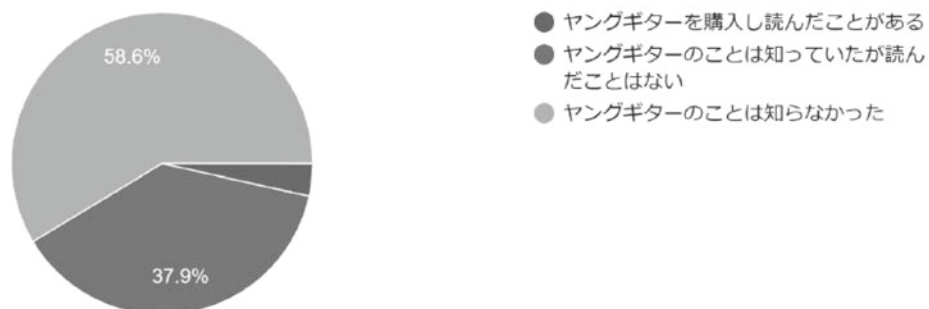


図8 ヤング・ギターに関する高校生の感想

ワードクラウド 単語 - バー 単語 - カウント 単語 - データ 単語ペア - バー 単語ペア -

上位300単語を表示しています。プロパティより「単語の数」を変更することができます。

[illegible]

### 図9 フリーコメントのテキストマイニング

図9より、「自分」という言葉が多く頻出している点が明確に示された。近年の高校生軽音楽部の大会においては、オリジナル楽曲を作成しコンテストにエントリーするバンドが非常に多い。オリジナル楽曲を重んずるポピュラー音楽は「自分」,すなわち,「学習者個々」にとっての演奏法の巧拙という考え方が重要になることが示唆された。

## 5.2 調査結果に基づく考察

4.4で示したように、今後のエレクトリックギター教則本のさらなる発展のためには「学習者個々の状況に対応した支援」や「探究学習を促進する仕組み作り」に注力する余地があると考えられる。1.5のギターセミナーで明らかになったことは、複数人のギタリストの演奏を同時に判定し、指導をすることは教師にとって容易ではない。しかし、リアルタイムで学習者のピッキングの強さ、ピッキングの軌道、アクセントの鋭さなどが複数のPC画面にグラフィカルに確認できることによって、今回のセミナーの座席表であれば、教師にとっては図2のP21からP25までの学習者を5人同時に確認して、問題がある学習者の傍に寄って指導をすることができることがメリットであった。一方で、P26からP30は教師の死角になるためPC画面を確認することはできないが、運動信号データはPCに蓄積されるため、後から学習者への助言を行うことが可能になる。映像記録の場合は、映像をいちから見直さなければならないという点で教師への負荷がかかるが、ギターセミナーで使用したソフトは、

エレクトリックギター教則本の歴史と今後への展望 39



データをログとして蓄積することができ、多人数での音楽教室における個々の学生の技量習得状況を低いコストにて可視化することができる。<sup>(25)</sup>この技術を教則本に付属させることができれば、学習者はプロとアマチュアの比較、昨日の自分と明日の自分の比較を自宅で実施することが可能になる。一方で、加茂らの研究では、運動センサデバイスによるエレクトリックギター奏法習得状況の客観的な評価として、その結果の解釈ならびに授業における学生へのフィードバック方法を十分に考察する必要があることが報告されており、その結果の解釈をギター指導に導入していくには授業設計と効果測定を繰り返し実施していく必要がある。この効果測定自体も学習者と出版社がクラウド上でデータで交流することにより、担当編集者や著者に負荷をかけることなく、教則本を活用した新たな探究学習としてデザインできると思われる。

リットーミュージック編集者にモーションセンサデバイスを体験していただき、アコースティック・ギター・マガジンWEBにて報じられた編集者の使用しての私見では、下記のコメントが寄せられた。<sup>(4)</sup>

実際にこのデバイスを付けて演奏した感想を述べさせていただきます。まず、何と言っても、自分の演奏の癖が把握できるのが面白い。私の場合、スナップを利かせたカッティングをしているつもりだったが、実際には手首の回転に依存した弾き方だった。このことを加茂氏に解説してもらった途端、演奏改善の手応えがあった。これを数分でも続けていれば、かなりの改善が得られたと思う。また、プロ・ギタリストの比較もでき、自分との相違点が明確になるのもポイント。つまり、ゴールまでの距離が明確になるのだ。また、日々の改善が実感できるので、モチベーションも維持できるだろう。

2023年8月25日にIEEE Japan Councilの講演会として行われた「現役ロックギタリストが博士学位を取得する意義」の講演会では、(株)シンコーミュージック・エンタテイメント取締役 吉田聡志氏からは、腕時計型モーションセンサデバイスを活用したレッスン方法について下記のコメントが寄せられた。<sup>(26)</sup>

これまでシンコーミュージック40年50年、ギターの様々な教則本を出してますけども、どうしても、今加茂先生がおっしゃったようにどこまで何が伝わっているかわからなかったし、感覚でフィーリングに頼って、フィーリングという言葉に頼っていた時期が長くて今もそんな

んですけど。そこに一石を投じて、今まで聴覚と勘でやっていた部分に視覚的な要素を入れて下さったというのは画期的だと思います。

これらのコメントから、教則本の今後においては、「聴覚以外の要素」の学習者側への提示が教則本制作サイドからも求められていることが示唆された。一方で、センサデバイスを教則本の新たな付属品として活用する場合、教則本+センサというパッケージの販売形態において制作コストと売上のシュミレーションを行う必要や、センサのデータをPC以外にスマートフォンでも確認可能なソフトウェアの開発、センサデータの解釈法の確立という課題が明確となった。

## 6. 結論と今後の展望

本論文では、著者の博士論文で提案した技術に基づいて腕時計型デバイスを活用したSTEAM型ギターレッスンを実施し、58名の高校生を対象に技術実証を行った。次に、国内の著名な教則本制作企業2社へのインタビューを通じて、エレクトリックギター教則本の歴史的背景や現状を分析し、教則本の特徴と、今後のさらなる発展の可能性について考察を行ったうえで、受講者からのアンケート分析や教則本制作企業からのフィードバックをもとに、テクノロジーを使用した教育法の可能性について検討した。「ヤング・ギター」では、新しい概念の導入がプロギタリストへの取材を通じて詳細に解説されており、学習者にとって技術的な内容がわかりやすく伝えられる工夫がなされている。また、演奏技法に関する分析記事や解説が豊富で、学習者が独自に技術を深められる点で自己主導型学習を強く支援している。一方、リットーミュージックの教則本群は、幅広い楽曲選択肢を提供しており、特に「ソロ・ギターのしらべ」シリーズは学習者が自分の好みに応じて楽曲を選べる点が評価できる。また、譜面や指導内容が詳細に説明されており、学習者が独力で学びを進められる工夫が見られる。教則本の歴史が学習者の独習という側面から始まったことを考えると、今後は学習者が自らの演奏の課題を発見し、探究的な学びに役立てるための仕組みを導入する方法を模索することで、教則本の効果を一層高める可能性があると考えられる。こうした仕組みを取り入れた教則本を開発することで、音楽系学校の授業においても、教科書やループリック、評価基準の整備が急務である教育現場でも幅広く活用される可能性がある。

## 謝辞

(株)シンコーミュージック・エンタテイメント取締役 吉田聡志氏、元ヤング・ギター編集長 山本隆士氏、(株)リットーミュージック 出版3部 額賀正幸氏、(有)アール・ジー・エス 代表取締役 北郷真氏には、本論文の取材に際して大変有益な情報をご提供いただき、誠にありがとうございました。

## 参考文献

- (1) 加茂文吉, ギター演奏の運動評価による技量獲得暗黙知の解明と教育への応用, <https://ci.nii.ac.jp/naid/500001571867> (2024年6月4日参照)
- (2) ヤング・ギター 2024年2月号, 腕時計型デジタル・デバイスを活用したギターレッスン革命!, (株)シンコーミュージック・エンタテイメント, p.149, 2024
- (3) ギター・マガジンWEB, ギタリスト加茂フミヨシ, 演奏技術を科学的に解明する研究で博士号を取得, <https://guitarmagazine.jp/news/2023-0328-dr-fumiyoshi-kamo/> (2024年6月4日参照)
- (4) アコースティック・ギター・マガジンWEB, ギタリスト加茂フミヨシ, 演奏技術を科学的に解明する研究で博士号を取得, <https://acousticguitarmagazine.jp/2024-0604-kamo-picking/> (2024年6月4日参照)
- (5) Mizok-Taylor, R. J. (2008). Promoting self-directed learning in adult piano instruction (Graduate Theses, Dissertations, and Problem Reports, No. 2870). West Virginia University. <https://researchrepository.wvu.edu/etd/2870>
- (6) デジタル大辞泉, 教則, 教育, 小学館, <https://dictionary.goo.ne.jp/jn/> (2024年6月4日参照)
- (7) 柳田益造, 音楽史から見た弦楽器一発祥の経緯と時代の要求に応じた変遷一, 音楽知覚認知研究, 19(2), pp.59-73, 2013.
- (8) Weedon, B. (n.d.). Play in a Day, <http://www.bertweedon.com/playinaday.htm> (2024年6月4日参照)
- (9) (株)シンコーミュージック・エンタテイメント, 沿革～詳細, <https://www.shinko-music.co.jp/corporate/history/detail/> (2024年9月8日参照)
- (10) Musicman, (2020). 元『ヤング・ギター』編集長・山本隆士氏インタビュー【前半】, <https://www.musicman.co.jp/interview/345297> (2024年7月1日参照)
- (11) (株)シンコーミュージック・エンタテイメント, ヤング・ギター, <https://www.shinko-music.co.jp/ad/young-guitar/> (2024年7月1日参照)
- (12) 平凡社, 別冊太陽 日本のロック 50s～90s, 日本のロックの変遷, 1993.
- (13) (株)シンコーミュージック・エンタテイメント, ギター・スコア掲載号リスト, <https://youngguitar.jp/guitar-score-list> (2024年7月1日参照)
- (14) ヤング・ギター 2009年7月号, Kiko Loureiro & Chris Impellitteri, (株)シンコーミュージック・エンタテイメント, p.15, 2009.
- (15) (株)シンコーミュージック・エンタテイメント, 別冊・増刊, <https://youngguitar.jp/books> (2024年8月31日参照)
- (16) ヤング・ギター 12月増刊スーパー・ギター・ヒーローズ, (株)シンコーミュージック・エンタテイメント, 1993.
- (17) (株)リットーミュージック, ギターがうまくなる理由へたな理由(紹介ページ), <https://www.rittor-music.co.jp/product/detail/3103217201/> (2024年5月1日参照)
- (18) (株)リットーミュージック, しらべシリーズ商品一覧(紹介ページ), <https://www.rittor-music.co.jp/shirabe/> (2024年9月1日参照)
- (19) 佐久間正英, 直伝指導! 実力派プレイヤーへの指標, (株)リットーミュージック, 2013.
- (20) 加茂フミヨシ, ギター朝トレ15分! 忙しい人のための濃密練習法, (株)リットーミュージック, 2012.
- (21) 加茂フミヨシ, ひたすら弾くだけ! 超絶ギター・トレーニング, (株)リットーミュージック, 2009.
- (22) (株)リットーミュージック, ギター しらべシリーズ楽曲一覧(紹介ページ), <https://www.rittor-music.co.jp/shirabe/songlist-guitar.html> (2024年9月1日参照)
- (23) 加茂フミヨシ, ひたすら弾くだけ! ギター・トレーニング, (株)リットーミュージック, 2007.
- (24) Exploratory v9 (Exploratory, Inc., USA, <https://exploratory.io>)
- (25) 加茂文吉, 松下宗一郎, 腕時計型運動センサデバイスによるギターレッスンクラスの拡張, 電子情報通信学会論文誌 D, Vol.J106-D, No.2, pp.123-131, 2023.
- (26) Kamo, F. The Significance of an Active Rock Guitarist Obtaining a Doctoral Degree, IEEE Japan Council, <https://www.youtube.com/watch?v=AUus70cIdG4> (2024年7月1日参照)

(かも ふみよし)